

- iii) 内容が広範になるため、一応位置づけはしたものの充分生徒が理解できなかったと思う。
- iv) 自分では全体として系統づけたいつもりであるが、生徒にとってはつかみどころがなかったと考えられる。もう少し「生産」との結びつきを考え、内容を絞って深くやった方がよかったのではないかとと思う。
- v) まだ、僕個人のとりくみに終わっており（一応やっている内容については、同じ教科を担当している先生には時々話している）、輪を広げる中で内容も深める必要がある。
- vi) 内容的に社会の教科でやるものが含まれている。しかし、いま社会科は年輩の非組合員ばかりで教科間の話し合いをする状況にないため、無理をしているところがあると思う。
- vii) グループ学習についてまだ充分自分自身経験が浅く、もっと勉強していかねばならぬと思う。

7. 今後のとりくみ

最後に、この授業を進めてきた中で感じたこと、今後の展望について記したいと思いません。僕の授業の内容は、昨年長野の教科「総

合技術」の内容について（49年1月の日教組教研で総括が行なわれている）詳しく知ることができたが、それと似かよったところがあり、テーマが広範で教える教師は非常にしんどいし、予備知識を得るのに非常な時間がかかる。やはり、集団的に担当教師が協力してやれる内容と方法を考える必要があると思う。

僕がとり上げた内容は1つの教科の中だけでは無理があり、他の専門教科、普通科目とも関連づけ、どこへどのように位置づけるかを考えていくことが大切であろう。

しかし、これまでこうした観点で技術や生産をとらえることができていなかったのではないと思う。今後、専門教科の中でも生産や労働に対する正しい考え方、見方を身につけさせる教育内容の創造が必要である。

来年、「機械工作」を担当することになるので、特に将来の高校教育の内容を展望しながら生産の基礎としての「機械工作」について工業経営でやってきた内容を生かしながら自主編成していきたいと思う。その時には、担当教師全員がとりくめる内容になるよう努力したいと思う。すでに技教研の会員の方で「機械工作」を担当しておられる方もあると思うので積極的に交流していきたい。

（大阪府立今宮工業高等学校）

真実を知ることの重要さ

「工業経営」の授業、実践へのコメント

佐々木 享

「工業経営」という科目について、吉田さんは、経験年数の長い年輩の先生方が担当し、若い教師には縁遠い科目であった、と書いている。この指摘は、今宮工高に限ったことではなく、かなり広汎な現象かと思う。吉田さんが自覚しておられるように、この科目は、卒業前の、つまり実社会にでる直前に行なわれる教育としていわば工業科の教育のしめく

くりの意味をもふくむ重要な位置を占めているように思われる。その意味で、この科目の教育に科学的な研究のメスが加えられ創意的な授業の実践が紹介されることをまず喜ぶたい。欲をいえば、吉田さんが教科書に感じとられた疑問点を、集団的な討議によって掘りさげたら問題がいつそう鮮明になったと思う。もっとも、この科目の教科書研究は、これだけ

でも独立した重要なテーマだから、別にその研究方策を考えてもよいと思う。

吉田さんの「工業経営」の授業は、教師の講義の部分と生徒が調べてきて発表し討論するという二つの部分に分かれているらしい。もちろん両者は関連し合っているのだろうが、今回の報告は後者に限定されている。いくつかの感想を記してみる。

第1に、事実を、真実を調べ学ぶことの重要性を改めて感じさせられた。現実の企業における「合理化」や労働災害の諸様相、公害についての真実というようなことは、いわばお説教になりがちな講義方式よりも、生徒自身が調べ掘り下げて考えるほうがずっと身にしみて考えさせることになろうと思う。このことが、47、48年度の吉田さんの実践と生徒の感想によく現われているように思う。そして、いったん真実を知ることの重要性に気づききっかけが与えられれば、いっそう深く知りたい、学びたいという要求に目覚めるのは、青年期の生徒たちの当然の性向だと思う。教師が意外に感ずるような本を読んでいるというところにも、その一端が現われていると思う（もっともこの読書要求は、「工業経営」の授業だけの影響ではないだろうが）。その意味でいって、この報告には出ていないが、読書指導とか図書館の図書や学習資料の充実なども重要な課題になろう。

第2に、吉田さんが正直に書いているように、この種の授業は「テーマが広範で教える教師は非常にしんどいし、予備知識を得るのに非常に時間がかかる。」これは重要な指摘だと思う。実際、この実践に限らず、授業の成否の大きな部分は、当該の教材についての教師の理解の深さと広さにかかっている。吉田さんの授業が成功していたとすればそれは、生徒が調査し発表するという授業形式がよかったことと共に、そこに吉田さんの「しんどい」学習があったからであろうことを、私たちは見逃がすわけにはいかない。

授業形式についていえば、吉田さんは、調べ発表する側に立つ場合の指導はしたであろうが、発表を聞き、討論に参加するいわば聞き手の側の指導はどうされたのだろうか。生徒自身が、発表してみではじめて「発表を聞く態度が悪い」ことに気づいたと述べている事実があるので、知りたかった点である。

ところで吉田さんは、こまかな点を別とすれば3年続けてほぼ同様の授業形式ですすめたのに、49年度の授業は「さんたんたる状態であった」とのべている。これは重要なことである。私たちは、成功の場合よりもむしろ失敗した実践に学ぶべきものが多いのではないかと思うからである。吉田さん自身も失敗の原因をいくつかあげておられるが、私には別の問題も感じられる。49年度の授業がうまくいかなかったのは偶然ではないように、思われるのである。

私たちの知っているところでは、職業科に進学する生徒の家庭の所得階層は、普通科のそれより低い。吉田さんの生徒たちの多くがアルバイトをしているらしいこともこれと無関係ではないだろう。とすれば、48年秋の異常な「石油危機」にはじまった猛烈な物価高のなかで、職業科の生徒とくに3年生のアルバイトのもつ意味も前年までとは違ってきたのではないかと推察されるのである。調べる時間を問題にしている生徒の生活実態が、以前と同じかどうなのかは掘り下げてみる必要があると思うがどうであろうか。

もうひとつ、吉田さんはさらりとしかふれていないが、大学進学希望者がふえていることも無関係ではないと思う。進学が現実からの逃避でないならば、また逃避にしないために、勉強することの意味をもう一つ問わないと、「工業経営」に限らず職業科の授業は「さんたんたる状態」になるおそれがあるように思われるのだがどうであろうか。まったく「しんどい」ことだが。

(専修大学)